研究ノート

認知症の人の社会参加の意味付けと支援について
―参与観察による「エピソード記述」の分析から―

The meaning and support of social participation of people with dementia
―Based on participating observation and the analysis of episodes description―

張　珉榮
Minyoung, Jang

1．研究目的
（1）研究の背景

認知症は、「通常、慢性あるいは進行性の脳疾患によって生じ、記憶、思考、見当識、理解、計算、学習、言語、判断等多数の高次脳機能の障害からなる症候群（ICD-10）」である。認知症の人の数は、日本全国に約462万人で、軽度認知障害（MCI）の人も含めると、約800万人と推計されている（2012年厚生労働省研究班調査）。その数は、高齢者人口の増加に伴い増えていくと推計されている。

従来、認知症の人は、認知機能の低下、失語、失認、徘徊などの症状により、周りから「何も分からない人」「呆けた人」と思われていた。そして認知症の人の暴力や暴言といった問題を起こす様々な症状を「問題行動」と捉え、介護者に身体及び精神的ストレスを与えるものとし、その負担を軽減することを目的に、介護やケアの提供を中心とした対応が取られてきた。しかし、2004年に京都で開催された国際アルツハイマー病協会国際会議で、日本で初めて当事者が公の場で自分の思いを発言したことで、認知症の人の考えや見解に関心が寄せられるようになった。また、認知症の人が、病気が治ったら「もう一度働きたい」「家族を楽にしてあげたい」といった望みも持っていることが分かった[1)]。その後、日本各地で、当事者が自分の思いを多くの人の前で語れるようになり、認知症の人の思いやニーズを聞き、それを実現できるようサポートする様々な取り組みが行われはじめている。特に、認知症を持ちながらも社会と繋がりたいという認知症の人のニーズから、当事者が積極的に社会に参加できるよう支援する先進的な取組みも行われている。具体的な支援として、デイサービスや認知症カフェなどを活用し、地域の人との交流を図り、就労する機会を提供するなど様々な形で行われ、その実践例が報告されている（井2013；井出2015；上野2015；佐野2015；前田2015；西山2013；比留間2011）。

2012年9月には、厚生労働省によって「認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）」が策定され、国の認知症への取組が示された。そして2015年1月に策定された「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）」によって、認知症の人の社会参加の発想が初めて施策に盛り込まれた。新オレンジプランでは、これまでの政策で重視されてこなかった当事者の視点が初めて示された。また、認知症の人の意思が尊重され、できるかぎり住み慣れた地域のよい環境で、自分らしく暮らし続けることができる社会の実現が示された。そこには、地域社会の中で役割を持っていきいきと生活できるよう支援し、自主的かつ継続的に活躍できる環境を整備することで、認知症の人自身が地域社会の担い手となっていく発想への転換が図られている。

さらに、2019年6月に策定された「認知症施策推進大綱」には、社会参加支援について、支える側として役割と生きがいを持って生活ができる環境づくりや、社会教育施設での講座の受講による学びを通じた高齢者の地域社会への参画、介護サービス事業所における認知症の人をはじめとする利用者の社会

査読結果通知日：2020年12月25日
論 文 受 理 日：2021年１月13日

参加や社会貢献の活動を後押しするための方策について推進・検討すること内容が盛り込まれた。

（2）先行研究の検討と研究目的

認知症の人の社会参加への支援について、上野（2015）は、社会的な存在である人間を「人として扱うこと」とし、孤立しがちな認知症の人の味方になること、社会の中で、さらには家庭の中でも、居場所を失ってしまう認知症の人に居場所を提供すること、認知症の人に自らの存在価値を再確認できる場を提供することを支援のポイントとして挙げている。また、井出（2015）は、認知症の人がやりたいと願うことを「友人」としてサポートすることを強調している。前田（2015）は、当事者を集めて社会から隔離している場所ではなく、いろいろな人が集まっている場所こそ「地域」であるとし、皆にとって大切な「居場所」を提供することが社会参加への支援において重要であると述べている。佐野(2015)は、認知症カフェについて、認知症の人と家族の「居場所」であるとし、あり方として、気軽にいつでも立ち寄れ、認知症の人が参加し、役割を持ち、活躍できる場所であると述べている。このように、社会参加に関する支援者の様々な思いから、認知症の人の社会参加の実現に向けた支援が行われている。

一方、当事者はどのような思いで参加しているのか、社会に参加することが当事者にとってどのような意味を持つのかといった当事者を意識した研究は少ない。また、当事者の視点を踏まえた支援のあり方を提示する研究はほとんど行われていない。

社会と何らかの関わりを持っている当事者は、現状をどのように捉え、どのような思いで社会に参加しているだろうか。また、それを支える取り組みにおいては、どのような視点が必要だろうか。支援においては、当事者の声を聞きながら、社会と関わっている実際の場で感じ取ったことから考察することで、当事者にとっての真の意味や支援に必要な視点が見えてくる。

以上のことから、本研究では、認知症の人にとって社会参加が持つ意味を、その場から出てくる発言や雰囲気から明らかにし、それを踏まえて支援において重視すべきことを考察することを目的とする。

2．研究の視点および方法

（1）研究の視点ー「社会参加」の操作的定義

社会参加については、研究者により様々な概念や操作的定義がなされているが、「集団で行っている諸活動への自発的な参加」を社会参加と定義している点ではおおむね一致している（前田, 2006）。ただし、「自発」という言葉は、外からの働きかけを受けずに、自然にあるいは自分から行う意味が含まれており、この定義からは、認知症の場合、認知症の進行程度によっては、全てを自ら進んで行うことが難しいこともありうる。しかし、認知症が進行していっても、何らかの形で必要な支援を受ければ、社会に参加することができる。従って、本研究では、認知症の人の社会参加について、「適切な支援により、集団で行っている諸活動へ参加すること」と定義する。

（2）研究方法

調査方法は、参与観察（Participating observation）を用い、調査を実施した。

具体的には、調査場所の施設を数回訪問し、当事者を含め職員や第三者とも関わりながら、利用者の様子を観察し、エピソードの記録を作成する方法である。参与観察を選定した理由は、筆者が施設で当事者や職員と同じ時間を共有し、本人の感情を分かち合うことで、慣れた雰囲気の中で当事者と職員や第三者との関係と、その関係の持つ意味を理解する為に適切な方法であると判断したからである。参与観察では、事象を対象化して客観的に捉える態度と、事象の下に何かを感じる態度の二つの態度を取ることによって、事象を「あるがまま」に客観的に捉えると同時に、参与観察者が他者の心情を感じ取ったり、そこに生まれる力動感を感じ取るように努めた。参与観察を通して得られた情報は、まず観察記録を作成し、利用者のエピソードを記述した。エピソードの記述及び分析については、鯨岡（2005）の「エピソード記述」を参考にした[2)]。

鯨岡の説に基づき、記述の際は、認知症の人と職員、第三者等との間で生じているものを表すために、「生き生き感」や「息づかい」を捉えて追加記述した。また、エピソード記述に際しては、今自分に捉

えられたものが記述にもたらされる際に、「これでいいのか」と吟味する態度を常に保持し、事象への忠実性を強め、描かれたエピソードの信頼性を高めた。また、利用者及び職員に筆者が正しく理解しているか確認し、その妥当性に努めた。

分析は、「背景」で、エピソード場面の背景になっている事実を示し、「エピソード」で、間主観的に把握した部分、自分の思い、場の雰囲気などを盛り込みつつ記述し、小題を付記する。また、「メタ意味（出来事から表面の意味を超えた意味、あるいはその奥の意味）」においては、「背景」と「エピソード」の記述からメタ観察（ 多元的意味を引き出す観察）を実施し、その際、読み手を常に意識し、共通理解が得られるように表現した。

３．倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会の定める研究倫理指針を遵守して行った[3)]。具体的には、施設長に研究の趣旨、研究の公表に際して、施設及び個人が特定されないようプライバシーの保護に努めること、得られたデータを研究目的外に使用しないことを、口頭と文書で十分説明し、文書で同意を得た。加えて、施設利用者に対しても同様に説明し、文書で同意を得た。

４．研究結果

（１）概要

・調査期間：2015年12月～ 2016 年6月
・場所：S施設（種別：地域密着型通所介護施設）
・利用定員：10名
・スタッフ：施設長、社会福祉士、介護職員

フィールドとなったS施設は、住宅街にある地域密着型通所介護施設である。定員は10名で、ほとんどの利用者が認知症である。S施設は、通所施設でありながら、認知症の人の思いを実現させるために様々な社会参加活動を先進的に行っている施設である。とりわけ「仕事がしたい」「社会の役に立ちたい」といった当事者たちの社会参加への希望に対し、認知症でも人としての社会的なつながりが広がるような活動を企画し、積極的に取り組んでいることから、認知症の人が実際に社会参加活動に関わっている様子やその支援をよく観察できると判断したため、調査場所に選定した。

（２）エピソード記述

エピソード記述は、全体から印象深かった出来事を切り取り、エピソード記述の目的と深く結びついた4つのエピソードに抽出した【表1】。

（表1）エピソード記述の概要

エピソード種類	小題	登場人物
エピソード1	【でも可愛いよ】	利用者A、子供C、スタッフ
エピソード2	【みんなと喋ること】	利用者A、子供C、筆者
エピソード3	【字が書けなくなっちゃった】	利用者G、スタッフ
エピソード4	【理解してもらおうと】	利用者P、筆者

①エピソード１【でも可愛いよ】

・背景

S施設の取組みの一つとして、近所の子供達を相手に、駄菓子屋コーナーを設け、世代間交流に努めている。在庫の仕入れから在庫の管理、販売全てを利用者が中心になって行ない、職員は、そのサポートをしている。利用者のAさんは、駄菓子屋の在庫管理や販売を担当している。仕入れについても、職員と一緒にAさんを含む利用者数人で問屋に行き、直接品物を選んでいる。

Aさんは、普段無口な人で、みんなとコミュニケーションを取るのが苦手であるが、元々子供が好きであることから駄菓子屋の活動に関わるようになった。駄菓子屋は、子供達が下校する午後の仕事として運営している。Aさんは、駄菓子の販売だけでなく、子供たちにさらに喜んでもらう為に、ポイントカードの制度を導入し、カードには子供の好きそうな、いろいろな絵を描いて駄菓子を買いに来る子供たちに渡している。子供たちが来ない時は、ポイントカードを作りながら、子供たちを待っている。

・エピソード

女の子Cちゃんが入って来た。Aさんは、明るい顔となり、普段の声とは全然違うとても明るい声で

挨拶を交わす。「おぉ、Cちゃん～！こんにちは」すると、Cちゃんも明るい声で「こんにちは」と答えた。

スタッフも来て、Cちゃんに声をかけた。「〇ちゃん（Cちゃんの妹）は？今日は一人？」

Cちゃんは、「〇ちゃんは、寝てる」と言い、スタッフが「お昼寝？」と聞くと、「うん」と答えた。スタッフは、Cちゃんと少し会話を交わした後、席を外した。

Cちゃんは、Aさんにポイントカードを渡した。ポイントカードには、スタンプがすべて埋まっていた。Aさんは、高い声で、「パチン、パチン、パチン、行けたね。まずこれだね。ちょっと待ってね」とCちゃんに言いながら、ポイントカードの更新のために新しいカードを取りに行った。

Cちゃんが、「ドラえもん大好き」と言うと、「いやいやいや、ちょっと待ってね～」と言いながらAさんは、箱から新しいポイントカードを色々出して来た。「おぉ～」Cちゃんは、色んな絵が描いてあるカードを見て喜んだ。

Aさんは、自慢そうに「いっぱいあるんだ～いっぱい～」と言った。Cちゃんは、ポイントカードを見ながら「わあ～スヌーピ可愛い！」と嬉しそうに叫んだ。Aさんは、「スヌーピがいい？」と聞くと、Cちゃんは「スヌーピ好きだからさ」と答えた。「あ、本当？」「うん」Aさんは、また質問した。「じゃ、スヌーピとスヌーピ以外だったら、どっちがいい？」すると、Cちゃんは、「スヌーピ」と答えた。Aさんは、スヌーピの絵が描いてある複数のカードを広げて「スヌーピもいっぱいあるよ」と言った。Cちゃんは、「可愛いね。スヌーピね」ととても気に入ったようだった。

Aさんが、「じゃ、スヌーピの方がいいかな。あと何かあるかな」と他のカードを見せると、「わ、すごい！」Cちゃんが何かに気がついた。Aさんが「変？」と聞くと、一つのカードを指指しながら「何かお猿さんみたいで、可愛い」と笑う。「一応クマと作ったんだけどね」とAさなんは、苦笑しながら言った。「おほ～。でも可愛いよ」Cちゃんは、Aさんのおかしい絵を可愛いと褒めながら、ふふふと面白そうに言った。「だって、こっちに耳あるんだもん。可愛い」Aさんは、耳の位置が下がっているクマの絵を見ながら「あれ？違うかな。あ、だから変なんだ！何か」と気がついた。

Cちゃんは、「だから、お猿に見えるんだよ」と面白そうに言った。

「なんだ～そっか」Aさなんは、また苦笑しながら言った。

「だから、ここ、お猿そっくりだよ。ふふふ。えーとー」Cちゃんは、楽しそうに笑った。

・メタ意味

駄菓子コーナーは、施設の入口の近くにある。入口には、駄菓子屋さんの看板を掲げて子供達がわかりやすくしている。施設というより駄菓子屋さんとして認識している子供が多いようだ。

Cちゃんが入って来た瞬間、Aさんはとても明るい顔となり、Cちゃんの来店を喜んでいる様子が伺えた。無口のAさんは、普段、誰かと積極的に会話を取ろうとする人ではないため、あまり笑顔を見る機会がなかったが、Cちゃんが入って来てからはあまりにも違う顔となったので、とても意外な姿で筆者は驚いた。「おぉ、Cちゃん～！こんにちは」の挨拶の言葉には、『お客さんが来た！待ってたんだよ～よし！さ、仕事だ！』という喜びと仕事態勢に入る勢いが感じられた。

Cちゃんも、とても明るい笑顔で挨拶をしながら飛び込んできたことから、駄菓子屋さんに来ることを楽しみにしていたように見えた。最初の挨拶から、二人の間には、信頼関係がすでに構築されていて、Aさんは駄菓子屋の仕事を楽しんでいる様子が伺えた。

スタッフは、最初にCちゃんと挨拶程度の会話を交わした。スタッフは、普段Cちゃんが妹と一緒に来ていることなどお客さんの情報をすでに把握していた。また、挨拶程度の介入で何気ないサポートをした後、お菓子の販売や会計などに関しては、ほぼAさん一人に任せていた。

Cちゃんは、駄菓子を買うだけでなく、ポイントカードをもらうことも楽しみにしていた。それは、来店して二人はすぐポイントカードの話から始まっていることから伺える。ポイントカードには、いろ

いろな絵が描かれていて、好きなカードが選べる。駄菓子を購入し、ポイントカードにスタンプを全部もらうと、カードの更新の際には、お菓子と別のポイントカードがもらえる。子供たちはAさんの可愛い絵をとても喜ぶため、Aさんは、ポイントカード作りに熱心である。「おじいさんが一生懸命作ったよ。Cちゃんのことばかり考えて」という発言からも、カード作りに一生懸命取り組んでいるAさんの様子が伺える。子供にだからこそ言える、とても素直な発言だった。子供たちが来ない時は、一人一人の子供達の顔を思い出しながら、何のキャラクターを喜ぶだろうと工夫しているような真剣な顔で黙々とカードを作っている。

Cちゃんとの会話中、Aさんは、ずっと子供に合わせて高い声で話していた。またCちゃんは、Aさんの描いた絵を嬉しそうに見ていて、その姿をまたAさんは嬉しそうに見ていた。Cちゃんの喜んでいる姿は、Aさんにとって仕事の原動力となっているように見えた。

猿に見えるクマの絵について、Cちゃんは、「だって、こっちに耳あるんだもん」と指摘しながら、一方で「可愛い」と褒めながら面白そうに言った。「猿に見えるクマで、ちょっと変だけど、可愛いし、おじいさんが一生懸命描いてくれたから。まぁ、いいか」と、Cちゃんは広い心で受け入れていたのである。

Aさんは「なんだ～そっか」と、優しい指摘を素直に受け入れ、「変なクマさんを可愛いと言ってくれるCちゃん優しいな～。ちょっと恥ずかしいけど、まぁ、いいか」と、二人で楽しそうに笑っていた。普段、大人との会話では見たことのないAさんの笑顔だった。クマであれ、猿であれ、それは大した問題ではなかったのである。

②エピソード２【みんなと喋ること】

・背景

AさんとCちゃんの会話後、筆者がCちゃんにいくつか質問した。

・エピソード

筆者が「ここに毎日来てるの？」と質問すると、Cちゃんは、ポイントカードを見せながら、「毎日ではないけど、これが2枚目だから、あとこれが3枚目」と嬉しそうに答えた。

「すごい！結構来てるんだ」

「うん！」

すると、Aさんは、「多分ね、一番かもしれない」と自慢そうに言った。

「え～常連さん！」Aさんは、「常連中の常連さん」と言いながらCちゃんを見る。

「え～大事なお客さんだ！」筆者は再び聞いた。「ここに来ると何が一番楽しい？」Cちゃんは、「みんなと喋ること」と答えた。「みんなって？」と聞くと、Cちゃんは「おじいさんたち」と答えた。筆者は、「え～本当？」と言うと、Cちゃんは嬉しそうに「うん」と答えた。

・メタ意味

Cちゃんは、ポイントカードを何枚も更新するほど、頻繁に来ている。その目的は、駄菓子だけではなく、「みんなと喋ること」が楽しいからであった。AさんとCちゃんは、互いに会話を楽しんでいた。二人で会話している時は、認知症の人と認知症じゃない人の関係ではなく、お菓子を売る人と買う人でもなく、ただの町のおじいさんと子供であった。また、二人の会話は、特別な内容ではなく、ちょっとした普通の日常会話のやり取りであった。この駄菓子屋は、施設側の企画で、施設利用者たちに役割を与え、楽しんでもらうためのものであると思っていたが、それは子供たち、すなわち第三者にとっても日常の楽しみとなっていた。駄菓子屋は、駄菓子を売ることが目的の場所ではなく、交流の「手段」であり、子供と利用者たちとの交流を図る場として用いられていた。交流は、相互のエネルギーが上手にやり取りでき、それが互いに新たなパワーとなっていた。

③エピソード３【字が書けなくなっちゃった】

・背景

午前中の施設内活動は、「ピクニックの企画」であった。翌月に野外活動が予定されており、スタッフと利用者Gさんは、共にその企画やチラシ作りの作業をしていた。作業の前に、スタッフがジャズの

音楽を流した。Gさんは、音楽を聴きながら、スタッフと相談して決まった内容を紙に書いていた。

・エピソード

「これだけ、スイング、スイング、ジャズが流れると、ちらし作りも捗るんじゃないですか」と、スタッフが言った。「ははは」それを聞いて、Gさんが笑った。

Gさんは、「よし、頑張らねば！」と気合を入れ、「朝の10時、ここを出発」と言いながら紙に書いた。スタッフは、「11時50分ですかね、ランチは。で、海鮮丼」と言うと、Gさんは、それを書きながら、「○○（地名）で海鮮丼、いいね。楽しみだ」と言った。

しかし突然戸惑い、「かいせん…。字が書けなくなっちゃった」と言った。すると、スタッフが、「魚を書いて」と、教えてくれた。

「魚？」

「そう、そう。次は、羊。どんは、うどんのどん。はい、真ん中に点」

スタッフの教える通りに書くと、「海鮮丼」の漢字が完成した。

「私、最近うーんと思うところ多いけどね」

「そうですか」

「本当。見ると…」

するとスタッフは言った。

「私だって思い出せない時しょっちゅうよ。でも教えてくれるから、みんなが。大丈夫」

それを聞いたGさんは、笑顔になって、「そうだね。ははは」と笑った。

・メタ意味

施設利用者たちは、多くの野外活動について、活動への参加だけではなく、企画からスタッフと共に関わっていた。Gさんは、チラシを作るという自分の役割を意識したのか「よし、頑張らねば！」と気合を入れて、真剣な顔で作業に取り組んでいた。スタッフがジャズの音楽を流したのは、作業への緊張感を少し緩め、リラックスした状態で楽しく作業ができるようにサポートしていることが読み取れた。Gさんは、そのおかげで、時にはリズムに乗りながら楽しく作業をしていた。

「楽しみだ」との発言からは、施設から外（地域）に出て行くことや、海鮮丼という美味しい料理を楽しみにしているGさんの気持ちが伝わった。

Gさんは、利用者というよりは、一見、企画者のスタッフのように見えた。しかし、突然「海鮮丼」の漢字が書けなくなった時は、戸惑ってしまい、不安そうになった。それに対してスタッフは、漢字を分解してより優しい漢字を一つずつ教えて、完成出来るように支援していた。一方で、Gさんは、認知症の進行とともに徐々に難しい漢字が書けなくなってきているのを自覚しており、それに対する不安を感じていた。それに対して、スタッフは「みんなが教えてくれるから大丈夫」と声をかけ、安心感を与えていた。

④エピソード４【理解してもらおうと】

・背景

筆者が、利用者Pさんに、施設で行なっている野外活動について聞くと、学童保育で紙芝居をしている話をしてくれた。Pさんは、前頭側頭型認知症により、反社会的な行動を引き起こす認知症の症状を社会の中で理解してもらえなかった経験から、社会に対する要望を普段よく語っていた。

・エピソード

「夏休みにね、学童保育って知ってます？小学校1年生から3年生まで。基本的に夏休みはね、学童保育で紙芝居をしにいってるんです。いつも楽しみにしているんだけどね。それもね、ここで作ったの。われわれが作った。図書館から絵本借りて、それをうつして描いて、紙芝居をやるわけ。で、最後にね、認知症の話をするわけですよ。それが目的なんだけどね。まぁ、みんな交代で読むんだけど、一緒にみんな後ろからいるわけよね。実はおじさんも認知症なんだよという、要するに、話をするわけですよね。子供は『え？』という反応。色んな話が出てくるわけね。なんでそういうことやってるか。みんなね、それぐらい思いがあるんですよね。私はね、先と同じようにこれから2、3年先にね、そういう超高齢社会をね、支えてくれる人はね、そういう子供たちじゃないですか。いまの小学校の子供たちが支えてくれ

る、支えてもらわないと困るんだけどね、基本的には私はそこからきてるんだけど、そのために、そういう小さい時から認知症だけじゃなし、一つのレベルとして認知症というんだけど、弱者、障害者に対してね、寄り添っていくとかね、心の優しい人とかね、そういうことを理解してもらおうと思って、植え付けタイプそういう目的からやってるんですよ」

・メタ意味

学童保育での紙芝居について話すPさんは、何かをアピールしたい様子で、情熱を持って語っていた。紙芝居を「ここで」作ったことや、「われわれ」が作ったことを強調する時は、誇りを持って語っているように伺えた。Pさんにとって、紙芝居をする目的は、「認知症の話をする」ためであり、それを通して、子供たちが「(認知症の人に) 寄り添っていく、心の優しい人」になってほしい、また、「理解してもらおう」という思いがあった。

5．考察

（1）認知症の人の社会参加の意味付け

全体のエピソードで共通的に見られたのは、第一に「楽しみ」を持って活動に関わっている様子であった。エピソード1、2では、Aさんが駄菓子屋の運営を通して、子供たちと関わる「喜び」、そして子供たちを喜ばせる「楽しみ」を感じている様子が伺えた。また、駄菓子屋の活動で地域の人と関わる機会が増えていく中で、互いに信頼関係が生まれていた。その信頼関係に基づく関わりにより、相手の喜びは自身の楽しみとやりがいに変わっていた。とりわけ、素直に話せる子供たちとの関わりにより、Aさんも素直になり、自然に笑顔になっていた。また、エピソード3では、Gさんの「楽しみ」との発言から、ピクニックという特別な企画への楽しみ、また、外に出て、美味しいものを食べて気分転換することを楽しみにしている様子が伺えた。エピソード4では、Pさんが学童保育の紙芝居を楽しみにしている様子が伺え、それは、子供達に対して認知症への理解を求める目的を実現することへの楽しみであった。

第二に、活動の中で「役割意識」を持って活動に関わっている様子が見られた。また、自分の役割を果たすことで、人の役に立っているといった自己効力感や自信の回復につながっていた。Herzogらは、高齢者の社会活動への参加について、社会的役割感を満足させ、自己効力感や自己満足という自己観念を持続させるとしている（Herzog et al., 1998）。認知症の人の場合、最初の診断による挫折感や、日常生活で出来なくなったことによる自信の喪失感が大きい（永田, 2015）。各エピソードの当事者は、役割を果たすことによって、その達成感、すなわち、自己効力感や自己満足という自己観念が生活への活力を与え、認知症の診断による挫折感や自信の喪失感は、「認知症でもできる」「人の役に立つことができる」との希望へ変わり、自信の回復につながっていた。

一方、「楽しみ」「役割遂行による自信の回復 」といった自己観念のみならず、「社会への積極的な発信」を目的に活動している様子も見られた。とりわけ、Pさんは、認知症の人への理解を積極的に求めて紙芝居の活動に関わっていた（エピソード4）。社会参加については、認知機能低下の抑制や生活習慣など健康状態の改善との関連性を求めることが多いが（小長谷他2015；Fujihara 2019）、認知症の本人は、自己効力感や自己満足といった自己観念だけではなく、社会の変化や改善を求め、自ら発信する思いから関わることもあった。

以上のことから、認知症の人にとって社会参加が持つ意味は、「楽しみ」「役割達成による自信の回復」といった個人的側面と、「社会の変化を求める積極的な発信」という社会的側面の二つの側面があることが示唆された。

（2）認知症の人の社会参加支援について

認知症の人にとって社会参加が持つ意味を踏まえ、認知症の人の社会参加支援において重視すべきことは、第一に、「楽しみ」の「場」の企画である。上野（2015）が指摘しているように、認知症の人に自らの存在価値を再確認できる場を提供することは大事である。また、「場」づくりには、地域住民からの協力や地域住民を巻き込む企画力が不可欠である。S施設は、地域住民から活動への協力を得るために、地域住民の認知症への偏見を払拭し、積極的

に地域住民の協力を要請していた。また、地域の人が自然に集まってきて、自然な関わりを通して互いに楽しめる交流の「場」を作るために、企画や交渉などの工夫を充実していた。その結果、「駄菓子屋」を通して地域の子供と関わり、「学校」の学童保育を通して生徒と関わることができていた。

第二に、社会参加を通して「役割の達成による自信の回復」につながっていることから、まず「ミスや失敗を受け入れる関係性や周りの環境作り」を重視すべきである。AさんとCちゃんが、猿のような熊の絵になっても互いに笑い飛ばしていたように(エピソード1)、「間違えることもある」ことを互いに受け入れ、互いに許し合う友人のような関係や間違えても大丈夫な環境があった。また、Gさんが漢字を書けなくなった時（エピソード3）においても、同様な経験があることを話すなど、不安にならないように声をかけ、安心感を与えていた。関わりにおいて、「間違えることを受け入れる」こと（小国, 2017）や、「友人」のような関係性の重要性（井出, 2015）が、本研究においても示された。

また、役割の遂行過程で重視すべきことは、「何気ないお気遣い」である。すなわち、人や場を注意深く観察し、本人が出来ることは過剰な介入を控え、余裕を持ってゆっくり待つこと、また、出来ないことについては何気なくサポートすることである。そのためには観察力と配慮が求められる。Gさんが漢字を書けなくなった時（エピソード3）に、スタッフが漢字を代わりに書くのではなく、出来ることは自分で出来るように、漢字を分解してより優しい漢字を一つずつ教えることで、最終的にはGさん自身で書けるようになった。スタッフは、認知症の人の出来ることや出来ないことを常に把握しておき、出来なくなったことに対しては、どのようにサポートすれば出来るようになるのかを注意深く観察して対応していた。本人が落ち込まないよう、気を遣いながら「何気ない」サポートをする配慮が必要である。また、役割の遂行過程において「共に参画できる社会活動支援」が求められる。企画された活動に単に参加するだけではなく、その準備や企画作業から役割を持って関わることで、「参画」が実現する。活動に参加する当事者の思いや意見を反映した活動は、より活気を与え、積極的に関わろうとする意欲を引き出すことができる。S施設は、野外活動や学童保育での紙芝居などの様々な活動において、当事者と共に考えて企画し、活動に取り組んでいた。Aさんが駄菓子の仕入れやポイントカード作りなどの準備作業から関わること（エピソード1、2）やGさんがスタッフ共に活動の企画やチラシ作りに参加すること（エピソード3）、Pさんが図書館から絵本を借りて紙芝居の絵を描くなどの準備作業から参加すること(エピソード4)が、良い例であるといえる。「参画」について、海外では、すでに認知症の人が参画する活動が行われ、日本にもその一部が紹介されており（阿部, 2016）、日本の認知症施策においても認知症施策の企画・立案や評価への認知症の人やその家族の参画が盛り込まれるようになったが、その実現に向けて、認知症の人に関わる全てのことに対して当事者が積極的に参画できるように努めなければならない。

第三に、「社会の変化を求める積極的な発信」という社会参加の意味付けを踏まえ、重視すべきことは、「主体性の尊重」である。認知症の人が社会参加について、「社会の変化を求める積極的な発信」という社会的意味としても捉えていることは、今の社会に認知症の人が生きるのに課題が多く、その課題を本人が実感しているとも解釈できる。その課題の解決に向けて、社会の認知症への偏見を払拭し、理解を深めるために、認知症の人自身が当事者としての役割を自覚していた。社会参加の支援においては、認知症の人の力をどう活かすべきかを中心に、認知症の人に出来ること、認知症の人が担い手になりうることを考え、人々と関わりながら社会の一員として自身の力を発揮できるよう、主体性を尊重することが求められる。

6．おわりに

本稿では、認知症の人にとって社会参加の持つ意味を明らかにし、社会参加活動を支える支援において重視すべきことを示した。

2004年の国際アルツハイマー病協会国際会議で認知症当事者として自らの思いや希望を発言し、日本

社会に当事者発信の時代への変革をもたらしたクリスティーン・ブライデン氏は、「私たち（認知症の人）の存在がなければ何も始まらない」と、認知症の人の全面参加を強調している（クリスティーン・ブライデン, 2012）。本研究は、認知症の人の社会参加支援を考えるにあたり、当事者にとって社会参加がどのような意味を持つのか、その思いを踏まえた上で、支援について考察したものである。一方、エピソード記述を中心とした研究としての限界がある。但し、本研究の分析方法は、一般化可能な意味を引き出すことではなく、個別の事例の持つ生き生きとした様相とそのかけがえのない一回性の意味こそ、記述に値する価値あるものであるとしている。個別事例を超え、一般可能な意味を引き出すことについては、今後の研究課題としたい。

〈注〉

1）国際アルツハイマー病協会・第20回国際会議（2004年）にて認知症当事者発言内容

2）鯨岡によると、「エピソード」とは、何らかの目的をもって、その場に生きる人を生き生きと甦らせるために、経験したことの全体から印象深かったことを切り取って提示するものである。また、「エピソード記述」は、人の「思い」、あるいはその場の「生き生き感」や「息遣い」を描き出し、他者の主観（心）の中の動きを筆者の主観（心）において摑む「間主観的」に把握する質的研究の方法である。エピソード記述では、個別具体の持つ生き生きとした様相と、そのかけがえのない一回性の意味こそ、記述に値する価値あるものとしている。エピソード記述の基本は、参与する自分を含めた事象の「あるがまま」を客観的に観察することを一つの必須条件とする。また、エピソード記述は、全体から印象深かった出来事を切り取る。その切り取られた部分は、エピソード記述の目的と深く結びついた観察者の暗黙の理論を「地＝背景」にして浮き出た「図」に対応する。

3）本調査を実施する時点では、筆者は明治学院大学大学院博士課程を満期退学したため、日本社会福祉学会の倫理要綱に則った。

〈参考文献〉

Herzog AR, Franks MM, Markus HR, Holmberg D (1998) Activities and wellbeing in older age : effects of selfconcept and educational attainment. Psychol Aging 13：179-185.

Fujihara S, Tsuji T, Miyaguni Y, Aida J, Saito M, Koyama S, Kondo K. (2019) International Journal of Environmental Research and Public Health, 16(5), 828.

Michael Angrosino (2007) Doing ethnographic and observational research, SAGE Qualitave Research Kit3 (=2016, 柴山真琴訳『質的研究のためのエスノグラフィーと観察』新曜社).

阿部民子（2016）「認知症本人が参画するロールプレイ：スコットランド認知症ワーキンググループ初代議長ジェームズ・マキロップ氏らによる専門職育成プログラムより（特集 認知症当事者とともに学ぶ）」『訪問看護と介護』21(3), 189-195.

小国士朗（2017）『注文をまちがえる料理店』あさ出版.

小国士朗（2017）『注文をまちがえる料理店のつくりかた』方丈社.

井出訓（2015）「認知症フレンドシップクラブの実践 (特集 認知症者の社会参加)」『地域リハビリテーション』10(9), 644-647.

井真治・町上貴也（2013）喫茶店を活用した社会参加へのアプローチ（特集 認知症の方が輝くケアの工夫）認知症ケア最前線 42, 24-27.

上野秀樹（2015）「認知症の人の社会参加の必要性 (特集 認知症者の社会参加)」『地域リハビリテーション』10(9), 632-636.

小長谷陽子・渡邉智之・小長谷正明（2013）「地域在住高齢者の認知機能と社会参加との関連性―社会活動および社会ネットワークを中心として―」『日本認知症学会誌 Dementia Japan』27, 81-91.

鯨岡峻（2005）『エピソード記述入門―実践と質的研究のために』東京大学出版会.

鯨岡峻・鯨岡和子（2007）「保育のための エピソード記述入門」ミネルヴァ書房.

クリスティーン・ブライデン（2017）馬籠久美子（翻訳）『認知症とともに生きる私:「絶望」を「希望」に変えた20年』大月書店.

クリスティーン・ブライデン（2012）NPO法人認知症当事者

の会 (編集), 永田久美子 (監修)『扉を開く人クリスティーン・ブライデン』クリエイツかもがわ.

クリスティーン・ブライデン（2012）馬籠久美子（翻訳）『私は私になっていく』クリエイツかもがわ.

佐野友美（2015）「宇治市における認知症カフェ（れもんカフェ）の取り組み：認知症の人にやさしいまち・うじを目指して（特集　認知症者の社会参加）」『地域リハビリテーション』10(9), 658-661.

永田久美子（2015）『認知症の人たちの小さくて大きなひと言 ～私の声が見えますか?』harunosora.

西山美雪（2013）「中重度の認知症の方へのレクリエーション(最終回)社会参加につながるレク」認知症ケア最前線 37, 113-116.

比留間ちづ子（2011）「 若年認知症の社会参加支援：若年認知症の就労型デイサービスの試み」病院・地域精神医学 54(1), 20-21.

前田信彦（2006）『アクティブ・エイジングの社会学―高齢者・仕事・ネットワーク』ミネルヴァ書房.

前田隆行（2015）「Next-generation DAYS BLG!：働く・はたらく・ハタラク（特集　認知症者の社会参加）」『地域リハビリテーション』10(9), 638-643.